

レディ・ホワイトとブランシェ

アナベルは ケスラー家の 客間を のぞいて、あぜんとした。荷物の 山の 一番 上には 巨大な ノアの 箱舟が、上部が開いたまま 横倒しになっている。しかも、中身はほとんど 床に 落ちて 山 となっている。

「ケイラ、早く 来て！ シ〜ッ、みんなを 起こさないようにね！」 アナベルが ささやいた。

「うわあ！ すごく たくさんの 仲間たちね。まるで、世界中の めいぐるみが 全部 集まったみたい。だけど、どうして みんな、ねむっているのかしら？」 ケイラが 言った。

「エリンと ジュリエットと 二人の 子供達が、はるばる ヨーロッパから やって来たばかりなの。向こうでは、今 みんな ねむっている 時間なのよ。時差ボケって 言うんですって。」 アナベルが 説明した。

「どうやら、体内時計と 関係があるらしいわ。」 アナベルが 自信ありげに 言った。

「ホー、ホー、わしゃ ねむっておらんぞ。」 フクロウの 鳴き声が 聞こえたかと 思うと、羽を バタバタさせる 音が して、箱舟の 中から フクロウが 飛び出てきた。

「わしゃ、オリーじゃ。フクロウの オリー。」

フクロウが つばさを 差し出すと、人形達は「こんにちは」と 言って 愛想よく あく手をした。

フクロウが 言った。「他の みんなは、昼でも 夜でも、ねたい 時に ねれば いい。ホーホー 鳴く 必要は ないからな。だが、わしは 夜には おきっていて、ホーホーと 鳴かねば ならん。そして、昼間に ねむるのじゃ。だが、今は 他の みんなと 同じく、目を さましておる。これでは わしの 知恵も 台無しじゃ。」

「まあ。どうしてなの？」 アナベルが たずねた。

「つまりだな、わしは 夜に しーんと 静まり返っていないと、耳を かたむける ことが できんのじゃ。ここに 着いてから、まだ 2、3 時間しか たっておらんし、日中の そうぞうしい 雑音と 混乱の せいで、自分が 考えている ことすら 聞こえん。」



アナベルは深く考えこんで言った。「では、何か手を打たなければいけないわね。アンジェラに相談しましょうよ。アンジェラはいつも、毎日の決まりごとが急に変わって大変な1日になっても、私達が静まって落ち着くのを助けてくれるもの。」

「ふむ。わしの決まりごとは、確かにメチャクチャにされてしまいおった。夜にねむるだって？ 正気な賢いフクロウなら、そんなことは絶対にせんぞ。」

「その気持ち、わかる気がするよ。」後ろの方から、声がした。

「あら、ブルーノ。こちらはオリーよ。」アナベルが紹介した。

「口をはさんでごめんよ。だけど、ぼくはクマだっていうのに、熱帯地方に来てから冬眠の楽しみがなくなって、参ってるんだ。」

「まあまあ、ブルーノ。不平は禁物よ。」ケイラが言った。

「そうだね、ごめん。だけど、そのことで話したかったら、喜んで話を聞いてあげるよ、オリー。」

「ありがとうよ。もし昼間に目がさめて、話し相手がほしい時には、よろしく頼むよ。」とオリー。

すると、ぬいぐるみの山がもそもそと動き、オリーに、だれと話してるのとたずねる声がした。

「おとなりさんのクマと人形達じゃ。出てきて、顔を見せなされ。」オリーが答えて言った。

すると、首にピンクのリボンを巻いた、雪のように真っ白なメスのホッキョクグマの子が出てきた。ブルーノは、目の玉が飛び出そうなほどドキッとして、息をのんだ。

「初めまして。私の名前は、ブランシェ・ホワイト。レディー・コンスタンス・ホワイトの娘よ。」はにかみながら、ホッキョクグマがあいさつした。

「初めまして、ブランシェ。私、アナベルよ。」

「私はカイラ。」



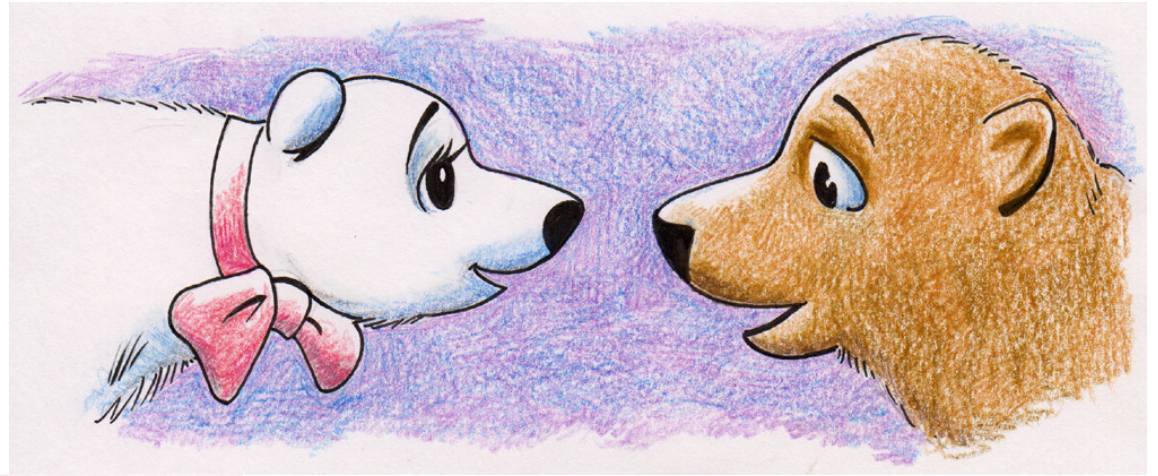
「ぼ、ぼく・・・プ、ブルーノ。」

「アナベル！ ケイラ！ 今日は1日中 ドールハウスが散らかしっ放しよ！」

ケイラが言った。「アンジェラだわ。私達、行かなくちゃ。お話しできて楽しかったわ、オリー。そしてブランシェも。みんな、早く時差ボケが直るといいわね。」

「ありがとう。まあ、思いっきり飛んでくれば、つかれてねむれるかもしれん。」

ホーと鳴くと、オリーは窓から飛び立っていった。後には、ブランシェのかがやく目に くぎづけになって言葉が出ないブルーノが残された。



「ねえ。あそこにあるバッグには、信じられないくらいおいしいものが入ってるのよ。」 ホッキョクグマの子は、いたずらっぽく笑いながらささやいた。

「はちみつかい？」

「もちろんちがうわよ。クマはみんな、はちみつを食べるもの。」

「シロップ？」

ブランシェは首を横にふった。「ちがうわ。もっといいものよ。来て。」

ブルーノはブランシェと、壁にかたむきかげんに開いているダッフルバッグによじ登った。

「なめてごらんさいよ。」ブランシェは大きなビンのふたを開け、中に前足をつっこんだ。

「う～ん。」ブルーノは舌なめずりをした。

「おいしいでしょ？」ブランシェがほほえんで言った。

「うん。これ、なあに？」ブルーノは再び前足をのろとしたこげ茶色の液体にひたしながら言った。

「糖蜜よ。」

「聞いたこと、ないなあ。」



「北ヨーロッパでは、どこにでも あるのよ。気をつけて、バッグの中の
あちこちに、したり落ちてるわ。」 ブランシェが注意した。

「ブランシェ！ 一体全体、何を してるの！」

ブランシェとブルーノが見上げると、大人の ホッキョクグマのおこった
顔が目に入った。ブランシェはドキッとした。

「マ、ママ！ ねてるんだと思ってたわ。」

「そこらじゅうを ベタベタにして。エリンと ジュリエットが見たら、
すぐおこるわよ。それに、そこに いるのは だれ？」

「彼は、ブルーノっていうの。彼も クマよ。」

「そんな こと、見れば わかるわ。だけど ヒグマじゃ ないの。」母グマは
うなり声をあげた。

「それが どうかしたの、ママ？」

「娘には、ヒグマと なんか 付き合っ て ほしくは ないわ。」

「だけど ママ、私達、まだ 初めて 会ったばかりよ。それに、彼は とっても
やさしいの。」

「そんな こと、聞きたく ないわ。今すぐ、その バッグから 出なさい。
前足を ふいて、茶色の 友達に さよならするのよ。」

涙ぐみながら、ブランシェは バッグから はい出た。そして 部屋を 出て
いくブルーノに手を ふると、母グマに 続いて 箱舟の中に入 行って 行った。



2回ほど ドアを ノックする 音が したかと思うと、だれかが「どうぞ」と
言う 間も なく、ドアが バタンと 開き、レディー・コンスタンス・ホワイトが
どかどかと 入ってきた。前足には 小さな 紙切れをつか んでいる。それを、
アナベルの 顔に つきつけた。

「これが 何だか、分かる？」 レディー・ホワイトが 言った。

「紙切れでしょ？」アナベルが わざと とぼけた 答え方を すると、パッペン
ドーフの みんなが どっと 笑った。

「一体、どうしたと 言うのよ？」 アンジェラが ねむそうな 声で たずねた。

「今は 昼寝の 時間よ。私、つかれてるんだけど。」

「あなたが、この しけた 場所の 責任者ね。それなら、この 件は あなたに 聞くべきね。」 レディー・ホワイトが
言った。

「この 件って？」

「これを 読んで ちょうだい。」

アンジェラは 紙切れを 受け取ると、短い 手紙を 読んで ほほえんだ。「やさしいのね。」

「やさしいですって？」 レディー・ホワイトが 荒々しく 言った。

「シーッ。お昼寝 してる 人が いるの。そうよ、やさしいわ。」 アンジェラが ひそひそ声で 言った。

「あなたの 所の ヒグマの 知り合いから 私の ブランシェへの 感傷的な ラブレターが やさしいですって？」

「ラブレターという わけじゃ ないわ。彼は ただ、ブランシェと いられるのを 感謝して いて、もっと いっしょに
時間を 過ごしたいって 言ってるだけじゃ ない。」と アンジェラ。



「それじゃあ、手紙の最後に書かれているこのXのマークと、大きなハートは何なのよ？」

「Xはキスのことで、ハートは・・・。」

「そういうこと。つまり、ラブレターじゃないの。愛が何か、まだ分かってさえないのに。ところで、彼はどこ？」

「ブルーノはたぶん、ふしぎの森で昼寝をしてると思うわ。あそこが好きなよ。」

アンジェラが答えた。

「私、ブルーノとブランシェが友達になったらすてきだと思うわ。」ドリスが口をはさんだ。「最近彼はさびしそうだもの。」

「さびしいですって。彼はさびしいってことがどんなことか、分かってないのよ。」レディー・ホワイトは低いうなり声で言った。

「ちょっとお聞きしますが、ブルーノがブランシェと関わることを、なぜそんなに反対するのかしら？」アンジェラがたずねた。

「彼は、社会的に地位の低いヒグマよ。だけどうちの娘は、純粋なホッキョクグマなの。だからそんなの、絶対にだめよ。」

プリシラがたずねた。「どうしてなの？近所にキャサリンとエドガーって人が住んでるけど、キャサリンは白人でエドガーは茶色いわ。とってもいい人たちよ。」

「それに、心からおたがいに愛し合っているわ。」アンジェラも言った。

「ふん。だけど、うちのブランシェがあなたのとこのブルーノと結婚して子グマが生まれたら、どうなるのよ？うちの純粋なホッキョクグマの家系が断たれるのよ。」

「子グマが白くないと、何か大きな問題にでもなるの？」ドリスがたずねた。

レディー・ホワイトは、プンブンしながらアンジェラの手から紙切れをつかみと取った。「とにかく私は、うちの娘があなたたちのとこのヒグマ友達とこれ以上関わることには、断固として反対ですからね。きっぱりお断りします。」

そう言うと、レディー・コンスタンス・ホワイトは憤慨しながら、ドアをボタンと閉めて出て行った。



アンジェラとパッペンドーフのみんなが、ヒルズ姉妹の家の前に用意されたお茶のセットの周りに集まった。「ヒルズ姉妹は、私達のために苦労して低カロリーのすてきな夕食を用意してくれたのよ、ブルーノ。」とアンジェラが言った。「口に合わないかもしれないけど、せめて楽しそうにしてあげてね。」

バーバラ・ヒルズも言った。「そうね。ここ2日ほど、あなたはふさぎこんでるわ。頭でもいたいなの？」

ブルーノは首を横にふった。

「じゃあ、寝不足？」ビバリーがたずねた。

「ブルーノはたくさんねてるわよ。原因はたぶん、あのことじゃないかしら。」

ケイラが言った。

「待って。私が当てるわ。えっと・・・、ブランシェのことでしょ？」アナベルが言った。

ブルーノはうつむいて、何も言わなかった。

「ブランシェって、だあれ？」バーバラがたずねた。

「ホッキョクグマのレディー・コンスタンス・ホワイトの娘よ。」

「まあ。上級社会のね～。なるほど。ずんぐりしてなければ、彼女はきれいなのにね。」とビバリー。

「減量のことなら、私達が何とかしてあげられるわ。」とバーバラ。

「クマはふつう、ずんぐりしてるものよ。病気でない限りはね。」アンジェラが言った。



ドアが勢いよくボタンと開き、ねむっていたパッペンドーフのみんなが目を覚ました。ただ、みんなのほっとしたことに、今回はレディー・コンスタンス・ホワイトではなく、娘のブランシェだった。彼女は泣きはらした目をしている。ブルーノは段ボール箱から飛び出した。プリシラの二段ベッドから落ちて一晩中床に転がっていたアナベルも、目をこすった。

「おはよう、ブランシェ。どうしたの？」アナベルが眠そうに言った。

「ママが……。一晩中、ママが帰って来てないの。どこに いるか、だれも 知らないのよ。夜 出かけたみたいなんだけど、まだ もどってきて ないの。」

「あら、大変。」とアナベル。

このころには、パップエンドーフのみんなもはっきりと目を 覚まし、この 会話を 聞いていた。

バーバラ・ヒルズが言った。「シュンバに さがしてもらいましょうか。きっと、すぐに見つけてくれるわ。」

シュンバは 疑い深そうに 目を 大きく 見開いた。

「それは どうか。大人の メスグマと 取っ組み合いをした ことなんて、ないからなあ。」とシュンバ。

すると、バーバラが言った。「取っ組み合いなんて 言ってないわ。ただ、見つけるだけよ。きっと、才能が 発揮できるわよ。だって、ジャングル・キングであなたは……。」

アンジェラが 二段ベッドから 出てくるのを見て、アナベルも すかさず 言った。「ノウジーでも いいんじゃない？ やって見たら？」

ノウジーが 言った。「においを たどれるよ。きっと 見つかるさ。」

「トラブルに 巻きこまれたのかしら？」とブランシェ。

「この辺りで 巻きこまれる トラブルなんて、あるかしら。ジャングルを うろつくような オスの ホッキョクグマも いないのにね。」バーバラが いやみを 言った。

アンジェラが 言った。「全く、バーバラったら。そんな 軽率な ことを 言うもんじや ないわ。」

バーバラは 肩を すくめると、ゆううつそうに かみの 毛を ブラッシングし始めた。

「ぼくが行くよ。」 そうブルーノが 言うと、みんなが 彼に 注目した。

「あなたが？」と ビバリー。

「ぼく、他の クマの においは よく 分かるんだ。」とブルーノ。

「ホッキョクグマでも？」とブランシェ。

ブルーノは 頭を ゆっくりと 上下左右に 動かした。「うん。もし 分からなかったら、彼女が 見つかるように 祈ることも できるし。」

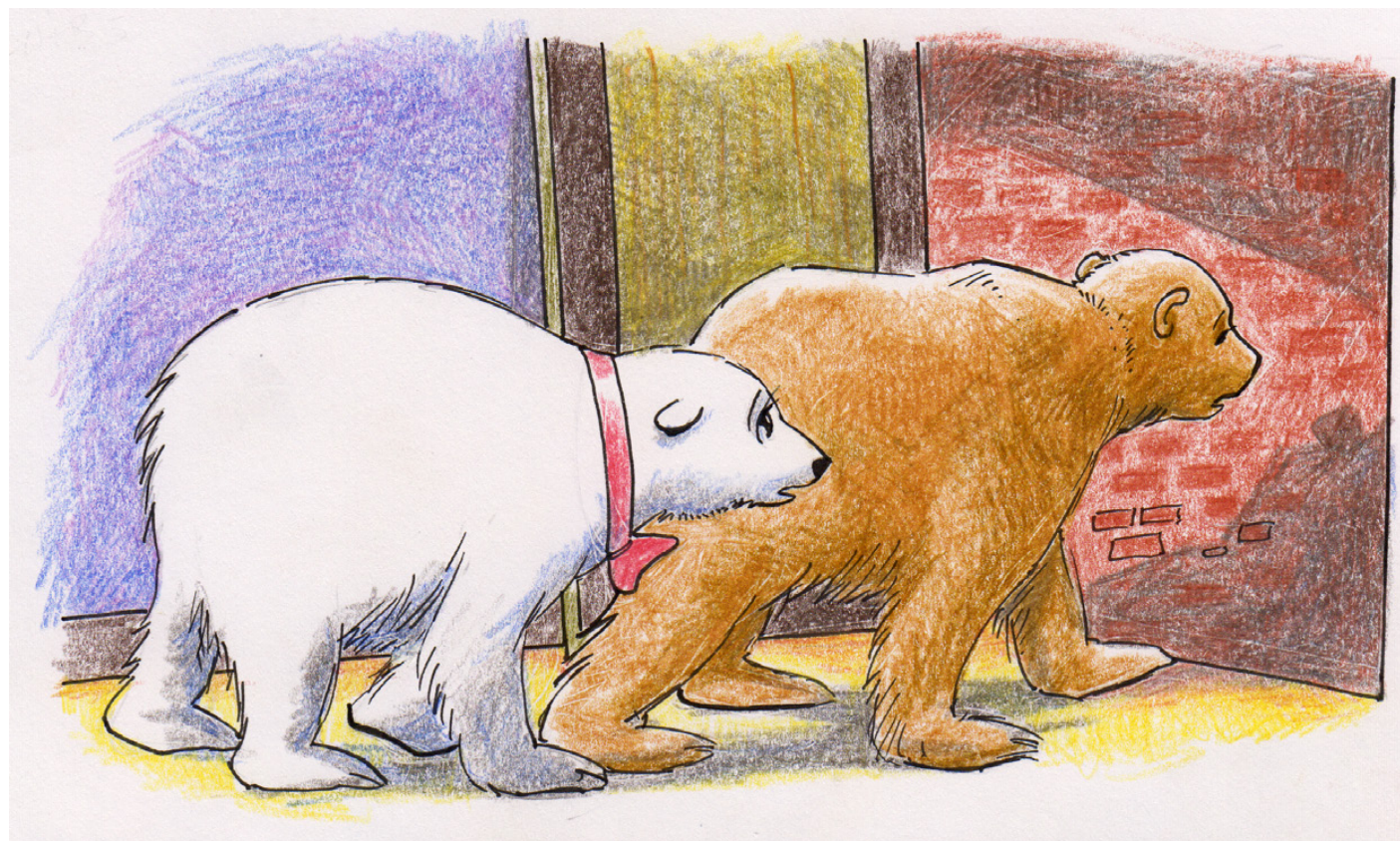
アンジェラが 言った。「立派ね。自分の 知恵に 頼るよりも いいじゃない。あなたに 任せるわ。」

快活そうに ほほえむと、ブルーノは 深く 息を すいこみ、胸を 張った。そして、前足を ブランシェに 差し出した。ブランシェも 信頼してブルーノの 前足を とると、二頭は 任務を 果たすために、ゆっくりと 部屋を 出て行った。

「どこへ行くの？」 地下室へ 向かいながら、ブランシェが たずねた。

急に、ブルーノは 空気の中に ただよっている においを かいで 言った。「……やっぱり、確かに クマの においだ。だけど、他の においも 混ざっている。」

「暗いわね。」 ブランシェが 不安そうに ブルーノに しがみついた。



「心配ないよ。ただの地下室さ。ここで人間の男の人達は、物を直したり、大工仕事をしたりするんだ。だから、ここにはいろんな道具や必需品があるんだ。」

「だけど、ママがこんな所で、一体何をやるかしら？」

ブルーノは「分からない」というように、肩をすくめた。そして、においをかぎ続けた。「そこだ！」突然そう言うと、ブルーノはすみに向かってずんずん入って行った。「あそこにあるの、例のバッグに入っていた大きな糖蜜のびんじゃない？」

ブランシェはうなずいた。そして、周りの床にこぼれて固まっている茶色のかたまりのにおいをかいだ。「そうは見えるけど、においがちがうわ。」

すると、急に地下室の明かりがついた。ブルーノとブランシェは、セメントの袋のかげにかくれた。

「その防腐剤のびんを持ってきておくれ。わしは、刷毛がきれいに なっているかどうかを確認しておくから。」と、年配の男の人の声がした。

すると、若いほうの音がした。「よしきた。・・・おい！ 子供のだれかが、ここにテディベアを落としたみたいだぞ！」

「大変！ ママだわ！」 ブランシェがひそひそ声で言った。

「こりゃダメだな。ゴミ箱に入れとくよ。」 若い男が言った。

ブランシェはわっと泣き始めたが、ブルーノがこらえるようにと合図した。

「ドアのそばに置いとけや。捨てるのは後でいい。今日はまず、あのさくのペンキぬりを終えなきゃいけないからな。」 年配の男の人が、階段を上りながら言った。

男の人達の声が聞こえなくなると、ブルーノとブランシェはぼうっとしているレディー・ホワイトの元へかけつけた。彼女は2頭だと気づくと、弱々しくほほえんだ。

「ママ！ そんなべたべたなものにひたっちゃって。一体どうしたの？」

ブルーノは彼女を自分の背中に引きずり上げて言った。「それは後で教えてください。今はとにかくここから脱出しないと。」

レディー・ホワイトがかれた声でささやいた。「どうしましょう。あの地獄の苦しみみたいな洗濯機の中に入らないで済むかしら。」

「ゴミ箱に捨てられてしまうよりはいいわ。ママが見つかって、本当に良かった。そこでおぼれてしまったかもしれないのよ。」 ブランシェが言った。



パップエンドーフのみんなが見ている中で、毛についた防腐剤の残りを洗い落とそうとプリシラがゴシゴシやっている間、シャンプーの泡が目にしみるなどとレディー・コンスタンス・ホワイトはぶつぶつ言っていた。

「私を乾かすために、洗濯ばさみでつるしたりなんかはしないでしょね？ここに来る前、人間達はわたしを洗濯機に放りこんだ後、つるしたのよ。本当に、地獄の苦しみみたいだったわ。」

プリシラがおだやかに言った。「タオルでふけば、そうしなくて済むかもしれないわ。」

「だけど、『洗濯機で洗えます』とか書いたラベルは持ってないんですか？」

ブルーノがたずねた。

「前はあったわ。だけど、ブランシェに切り取ってもらったの。人間に、洗濯機で洗おうなんて考えてほしくなかったもの。問題は、そんなラベルがあってもなくても、人間はとにかく私を洗濯機に放りこんだってことよ。」

アナベルが言った。「もし毎日 こまめに 洗っていたら、そんな おおごとにならなくて済むわ。」

「私は、いつも 白い 毛に 少しも よごれがないように していたのよ。しみの ついた ホッキョクグマなんて、全く 恥さらしですからね。ここにいる 娘の ブランシェにも、清潔さをおこたるたびに、注意しなければならなかったのよ。」

「ママ〜。」 ブランシェがうなった。

「とにかく、大部分は 落ちたわ。」と 取り乱した クマを タオルで ゴシゴシ ふくと、ドリスが言った。「だけど、色が 少しずつ 落ちていくまでは、茶色の ままでいなくちゃいけないようね。」

「まあ、何てこと！ 茶色ですって？」 レディー・ホワイトは ぎょっとした。

「残念だけど、これ以上は 無理よ。でも、すてきな 明るい 茶色よ。」と アンジェラ。

「ぼくは、とっても 似合うと 思いますけど。きつと、ロード・ホワイトも、気に入ってくれると 思います。」 ブルーノが言った。

「ロード・ホワイトは、こんなの 目にも くれないわ。」 レディー・ホワイトが 悲しげにつぶやいた。

きづまりな ちんもくを 破って、アンジェラが言った。「それにしても、防腐剤って、強烈ね。それが 何だと思ったんですって？」

「糖蜜よ。」 レディー・ホワイトは おどおどしながら 答えた。

「それ、何？」 ドリスが たずねた。

「モラセスみたいなもの。黒っぽい シロップみたいなものよ。」 プリシラが 答えた。

「とにかく それが、ものすごく おいしいらしいのよ。そうでしょ？」

レディー・ホワイトが うなずいた。



パップエンドーフの 部屋の ドアを ノックする 音が した。

「どうぞ。」と 返事が 聞こえると、ドアが ゆっくりと 開いた。レディー・コンスタンス・ホワイトだ。

「今、おじゃましてよろしいかしら？」

「ええ、もちろんよ。」 アンジェラは 読んでいた 雑誌を 置くと、すみの いすから 立ち上がった。「みんな ねているから、ひそひそ声でね。」

レディー・ホワイトと アンジェラは その日の 出来事について ちょっと 世間話を した後、レディー・ホワイトが 言った。「とにかく 私、防腐剤事件から、人生の 教訓を たくさん 学ばされたわ。現代風に いうと、目を 覚まさせられたって 言うのかしら。」

アンジェラが うなずいた。

レディー・ホワイトは 話し続けた。「私、ブルーノの ことを 不当に 悪く 決めつけて いたわ。彼は とうとい クマなの なのにね。今回の 事件で、彼は 実に 立派だった。賞賛に 値する ふるまいだったわ。」



レディー・ホワイトの^め目に、なみだがあふれた。「クラレンス・・・つまり、ロード・ホワイトのことなんだけど、彼はブルーノのことをとても^{ほこ}誇りに^{おも}思ってくれると思うわ。そしてきっと、^{むすめ}娘とブルーノが^{ともだち}友達になるのを^{しゅくふく}祝福してくれると思うわ。」



「それは^{たし}確かね。どうか、私の^{わたし}祝福と^{しゅくふく}おわびの^{きもち}気持ちをお^{つた}伝えくださいな。」とレディー・ホワイト。

「もちろんよ。そしてあなたももちろん、いつでも^{わたしたち}私達のお茶会に^{ちやかい}歓迎するわ。エリンとジュリエットの^{とうみつ}おかげで、糖蜜もたくさんありますから。」

「そんなことを^い言ってくれるなんて、本当に^{ほんとう}やさしいのね。」アンジェラはティッシュを^き差し出しながら^い言った。
「だから、ブランシェがブルーノと^{ともだち}友達になっていいっていうことを、^い言いたかったの。それに、^{はこぶね}箱舟でやることには^{なん}何でも、いつでも^{かんげい}歓迎するわって^{つた}伝えたかったのよ。」
「本当に^{ほんとう}ありがとうございます。ブルーノにとって、それが^いどんなにうれしいことか、^{そうぞう}想像できないでしょうね。彼は^{かれ}パップENDORFでは^{もっと}最も^{たよ}頼りがいのある^{いちいん}一員なんですよ。」とアンジェラが^い言った。

